

言葉と悲劇

柄谷行人

# 言葉と悲劇



柄谷行人

第三文明社

柄谷行人 (からたに・こうじん)

文芸批評家・法政大学教授。

1941年、兵庫県に生れる。

東京大学経済学部卒業、同大学院英文科修士課程修了。

1969年、「意識と自然——漱石試論」により群像新人文学賞受賞。

1975～77年、イエール大学東アジア学科客員教授。

[著書]

『畏怖する人間』(トレヴィル)『意味という病』(河出書房新社)『批評とポスト・モダン』(福武書店)。

『マルクスその可能性の中心』『日本近代文学の起源』『隠喩としての建築』『内省と廻行』『探究Ⅰ』(以上、講談社)。

『ダイアローグⅠ』『思考のパラドックス』『ダイアローグⅢ』(以上、第三文明社)他。

## 言葉と悲劇

1989年5月15日初版第1刷発行

1989年6月30日初版第2刷発行

柄谷行人——著者

栗生一郎——発行者

株式会社**第三文明社**——発行所

東京都千代田区三崎町1-1-9(〒101)

振替・東京5-117823 TEL(03)294・8731(代)

図書印刷株式会社——印刷所

株式会社**星共社**——製本所

菊地信義——装幀

©Karatani Kojin1989, Printed in Japan  
ISBN4-476-03144-7

言葉と悲劇

柄谷行人

目次

5	バフチンとワイトゲンシユタイン
29	漱石の多様性——「こころ」をめぐって
45	言葉と悲劇
63	ドストエフスキの幾何学
89	江戸の注釈学と現在
129	「理」の批判——日本思想におけるフレモタンとポストモタン
149	日本的「自然」について
175	世界宗教について

199—— ス。ピノザの「無限」

223—— 政治、あるいは批評としての広告

247—— 単独性と個別性について

267—— ファインズムの問題——ド・マン／ハイデガー／西田幾多郎

287—— ポストモダンにおける「主体」の問題

311—— 固有名をめぐって

325—— 安吾その可能性の中心

343—— 講演データ

344—— あとがき



バブチンとウイトゲンシユタイン



僕は大学祭にはほとんど行きませんが、ここにだけはもう四回来ています。それは、連続性があるために話しやすいからです。逆にまた、一年おきに非連続性を確認できるからでもあります。この場所で、今まで話してきたことをふり返ってみると、「内省と遡行」を書いた時が一回め（一九八〇年）、それからゲーデル問題つまり「形式化」について扱った「形式化の諸問題」を書いてある時（一九八一年）、そして三回めが一昨年で、そのとき僕は行きづまっています。昨年の秋は、アメリカに滞在していたわけです。べつにそこで考えなおそうと思ったのではなく、「考えない」ようにするために行ったのです。そして、半年あまり何も理論的なことを考えないようにしている間に、僕は何か突破口が見えたような気がしました。それはまだ漠然としたものですが、これから『群像』で「探究」という連載をやるので、その中でハッキリしてくると思います。きょうは一つの区切りをつけるために、これまでこの早稲田で話してきたことを、もう一度ふり返ってみることにします。

僕は「内省と遡行」で扱った問題を考える前は、マルクスの『資本論』を問題にしていました。貨幣、つまり価値あるいは価値形態をやっているかぎりは、言葉あるいは「意味」を扱うのところが、ある種の錯覚を免れるという利点がある。それは自分の「内部」に問う必要がないからです。物が交換されるとは、どういうことか、等価だから交換されるとすると、では、なぜそれらの物が等価なのか、というような問題をやっているかぎり、自分の「内部」に直接問う必要はまったくないのです。それは価値というものが、ある種の客観性を持って存在しているからですが、しかし、これはとても不思議なことですね。

キルケゴールは最晩年の日記に、自分の本が売れることにすごく驚いた、というようなことを書いています。彼はずっと遺産で食いつないできて、ちょうどその遺産がなくなつた時に死んだ人ですけれどね。そのキルケゴールが驚いたこととは、つぎのようなことだと思ひます。つまり、書いたものが売れて金に換わつて返つてくる。そして、こんどはその金で何かを買う。ということとは、思想や内面性が、そのへんで売つてゐる大根なりキャベツなりと等価になるということです。そういう関係の客観性の不可思議さに、彼は衝撃をうけたわけです。「商品」を考へるときには、ふつうの意味での物だけではなく、自分自身が書いたものなども含んでしまふ。にもかかわらず、このようなことを問うてゐるかぎりには、自分の「内部」に問ふ必要はありません。それどころか、そういう「内部」が無効化されてしまふことが、価値形態というもののなのです。

しかし、「意味」というものを問ひ始めると、とたんにおかしくなつてしまひます。これは「内省と遡行」の中で書いたことですが、われわれは意味というものを外に見つけることはできない。それは、やはり内にある。だから内部に問わなければならぬ。けれども、内部に意味を問ひつゝも、われわれは「意味が存在する」ということを認めるわけにはいかなひ。ちよつと商品に価値が「内在」してゐるのを認めるわけにはいかなひように。にもかかわらず、われわれは意識から出発する以外にない——「内省と遡行」の段階で僕が考へてゐたこのようなことを、ニーチェは、つぎのような一種のパラドックスで表現してゐます。それはまず、主観につまり意識に問うな、ということから始まります。なぜなら、彼によれば、意識にとつてはすでにすべてが一つの整序されたシステムと化してしまつてゐるが、本当は主観というものは多数あるのかもしれない、そしてその多数の主観の間で、ある専制政治があり、それがあたかも一つの主観があるのかごとく現れてゐるだけかもしれないのだから、と。こうしたニーチェの観点は、もっと狭い範囲に限られてゐるけれども、フロイト

に受け継がれていると思います。ニーチェは無意識ということとはとくに述べていませんが、主観の多数性ということを書いていますから。

意識にとっては一つの体系、単一体系しか存在していないという問題は、あとでバフチンのことを話すときにまわしまして、ここではとりあえず「内省と遡行」の展開にそって、「意識に問うてはならない」という問題をさらに進めます。ニーチェは意識に問うなといながら、もう一つの選択肢をも同時に排除しています。彼は意識ではなく「身体」や「生理学」から出発せよといながら、それを同時に否定しているのです。行動主義 *behaviorism* みたいなもの、つまり狭い意味での生理学や心理学から「意味」の問題を扱うのはだめだ、と彼はいつているのです。いいかえれば、やはり「意味」の問題というものは「意識」から出発しなければならぬ。ニーチェは統一的でシステムティックな書き方をしませんから、それが各所の間の矛盾として現れていますね。ニーチェの書き方においては、ある主張が、それを否定する主張によって絶えず乗り越えられていくという形でテキストが構成されていると思います。だから、それを一つにまとめようとすると必ずおかしくなるわけです。

さて、上述のようなニーチェの観点をかりに「ニーチェのパラドックス」と呼ぶとしますと、実はこれは「意味」の問題を考えたときに必ずつきまとう普遍的なパラドックスなのです。

「意識に問わなければならないが、意識に問うてはならない。」

こうなると、単純に（生理過程等の）外部に依拠するわけにはいかなくなります。すると、まず「意識」に向かう、つまりいったん意味が「ある」と認めるところから始め、そして、その意味を形式的な差異体系に還元していくという方法がとられることになります。これは現象学的方法ですね。しかし、この形式的な差異

体系は、すでにニーチェがいったように、つねに一つの閉じられたシステム、すなわち均衡システムをなしている。それはソシュールのタームでいえば、共時的なラングにあたるのですが、それはたんに、すでに安定してしまつたシステムでしかないのです。これは、意識に問うたときに現れる限界にほかなりません。意味の問題を形式化して、そこから遡行しようとしているにもかかわらず、それ自体すでに一つの形式体系の中に閉じこめられてしまふのです。

構造主義的な言語観のこうした限界を突破するには、そして安定した閉じた差異体系を解体するには、どうすればよいのか、その場合、意識の「外」を持ちこんではならないとしたら。ジャック・デリダ、とくに初期のデリダは、そういうことを考えたのではないかと思うのです。彼は、形式体系それ自体の中でそれを壊そうとします。だから、*différance*（差異化≡遅延化）というような考え方を持ちこみます。いいかえれば、「形式体系それ自体が自己差異化する」という観点を出示してきたのです。それは、すでに外部 $\parallel$ 対象<sup>レフアレント</sup>を排除したうえで、なお外部性を内部に見出そうとするものですね。ある閉じられた単一な均衡体系を壊そうとする場合——この体系が意識の内部を問うことよつて得られる以上、これと相関的な指示対象（外部）はもうすでに排除されているのだから——この体系それ自体が自壊的なものだと考えればよいのではないか。これが「内省と遡行」を書いた段階での僕の考えでした。

けれども、その後、ゲーデルの問題に出会つてからは、今、言語学とか現象学でいわれている問題はもっと大きな広がりを持っているのではないか、と思うようになったのですね。たとえばデリダのディコンストラクションというのは、ゲーデル問題の証明の中の一つの例にすぎないのではないかと。

というより、もともと僕の関心はそういう哲学プロパーの問題だけではなく、もっと別のところにもありま

した。それは科学とかテクノロジーの問題です。僕はゲーデルの問題を考えたところ（一九八〇年、ダグラス・ホフシュタッターの『ゲーデル・エッシャー・バッハ』という本をアメリカで読みました。ホフシュタッターは、その本の中で、たとえばゲーデル数による自己言及ということとDNAの自己複製 reproduction の過程とを類比していますね。じつにうまい図を用いて、二つの同じループを描いて類比させた。主体がまずあってそれが何かを作るのではなくて、主体（製作者）がないまま物が作られてしまうことがいかにして可能かが、これでわかります。

そういう考え方を、科学のほうが出してきた。まあ、皆さんの世代にとっては、すでに高校の教科書くらいで習ったなじみの事柄だと思うのですけれども、分子生物学のセントラル・ドグマである二重螺旋の問題は、僕らにとっては大きかった。それと人工知能です。この二つはたんに密接に関連しているばかりではなく、神が存在しない世界というものを考えた場合、神 $\parallel$ 建築者なしに世界を構成しようとするなら、いったいどのようにしてできるのか、という問いの答えとして、とても面白い考えを出しているわけです。

したがって、僕がゲーデルの問題に興味を持ったのは、必ずしも哲学的問題、あるいは数学基礎論——それもまた哲学的関心の一つですが——とかいうものからではなかったと思います。それらとは別の現代の新しい宇宙論、生命論、それに人間論といったものから不可避のものとして、自己言及という問題が出てくる。それが僕がゲーデルの問題に赴いたことのもう一つの大きな要因だったと思います。

## 2

先日、免疫学者の小林登さんと対談しました（『ダイアログⅢ』所収）。彼は、免疫の問題をある歴史的な展

開から捉えています。たとえば免疫の考えに関して、二〇世紀の前後に一つの転換があったといふのです。従来までは、外部から細菌などの異物が入って、それに対する抗体が内部にできるといふ考え方でした。ところが、それではいろいろな矛盾が出てきた。そういう理論で免疫抗体を人工的に造ろうとした場合、起ってくる矛盾として、たとえばアレルギーというものがある。これは自分自身に対して被害を及ぼすわけですから、まずあらかじめ内部に抗体ができて、それが何らかの外敵に対して作用を及ぼす、という考えではどうしてもうまくいかない。

小林さんは、免疫に対する考え方の転換を「外から内へ」といふ呼び方をします。その転換した新しい考え方は、「細胞免疫」といふ言葉を使って、細胞自体が自分と自分でないものを区別している、そういう免疫系が根本にあるのだと考えます。一九世紀までは「外部」に対してどうこうというような考え方をしていたのに対して、二〇世紀に入ると一転して、いわば「内面」のような細胞それ自体のレベルで、自己と非自己が差異化している。まさにそれこそが免疫学の問題なのだ、というふうな転換したわけなのです。これは比較すると面白いのですが、二〇世紀前後という時期は、数学者の世界的な会議があったりして（そこでヒルベルトが長い声明を出したりしましたが）、「数学の危機」と呼ばれていた時期なのです。それまでも非ユークリッド幾何学は事実としてどんどん発展してきているわけですが、ユークリッド幾何学の基礎づけという問題が、この時期に数学の危機の問題としてハッキリしたのです。

ユークリッド幾何学の存立は、ある種の外部、つまり直観や知覚にもとづいて確保されますね。一方、非ユークリッド幾何学というのは、たんにユークリッド幾何学の第五公理に反対して成り立つという幾何学ですけれども、両者の基礎づけ、連関は、「ユークリッド幾何学が正しければ、非ユークリッド幾何学も正しい」と

いうような、まるで相対的なものでしかありません。では、ユークリッド幾何学それ自体の存立の証明はというと、それはできないのです。そこで登場するのがヒルベルトの形式主義です。それは、他者依存的な証明ではなく「絶対的」な証明をしようとしています。その結果、完全な形式化・形式主義化、つまり外部を完全に排除することが行なわれる。数学は、もはや数学的なものとの何の関係もない。たとえば、そこいらの椅子やテーブルでも数学（幾何学）ができるというような形式化をやるわけですね。それが、だいたい二〇世紀の初頭のことです。

さらに、共時的な動きとしてもう一つ付け加えておきたいことは、ソシュールの言語学です。言語においては、言語の意味と対象——つまり指示対象レファレントがいつでも問題になります。それは意味であれ指示対象であれ、何らかの外存性をいつも前提にしているわけですが、ソシュールはその前提を覆そうとしますね。そこで言語を差別的なシステム、つまり一つの「形式体系」として考えようという動きが起ったと思います。

しかし、この「形式体系」というのは、いわゆる言語の流れを現在の一瞬のうちに止めて、それを共時的な体系として捉えるということから出てくるのではないのです。そうではなくて、先にも述べたように、それは自分の意識に問うことから出てくる。つまり、自分の意識にとって、言語とは何かということ考えたときに出てくるのが、共時的な形式体系なのです。いいかえれば、それは個人の意識において見出される。たとえば、日本語の体系など誰にもわかりませんか。標準語だけが日本語ではないのですから、現在どのような言語が日本で話されているかは、観察によっても総体はつかめない。つまり日本語のラングというのは、ある個人にとって存在するシステムなのです。だからラングという考え方は、観察されたもの、つまり経験的なものを意味しているのではなくて、意識の中で意味を問うたときに出てくるものであり、それは一つの形式であり、

形式体系なのです。

ここでまとめてみますと、免疫の問題、数学の問題、言語の問題のそれぞれが、いわば「外から内へ」という転換を遂げたということですね。困難は、ここから始まります。「内」だけでやろうとすると、どうしてもうまくいかないからです。しかも単純に「外」にうったえることは許されません。まず言語の面からいいますと、結局、デリダやクリステヴァなどもそうですが、それは、一つの閉じた形式体系、ラング、とにかくこれを内在的に壊そうという意図の中から出てきました。人によって違いはありますが、総じてポスト構造主義というものは、ある閉じた言語体系、あるいはテキストの中に閉じこめられている一義性というものを解体しようとする動きだと思います。

その方法は、あるテキストから、そのテキストが通常持っているそのテキスト固有と思われていた意味とはまったく対立する、ある別の意味を引き出してきて、あるテキストが、ある一つの意味を持つということを決定的な状態に陥らせることです。これがディコンストラクションの常套手段です。一方、数学のほうにおいては、ヒルベルトの形式主義に対して、ゲーデルのやった方法がそれに当たっています。ゲーデルは、いかなる形式体系も、その中では、真であるとも、偽であるとも決定できない命題を含んでいるということを証明した。そうすることで、彼は逆説的に、完全な形式体系の存立の可能性を否定してしまつたのです。

さて、これを免疫のほうに置き換えてみますと、まず最初に、自己―非自己を区別する免疫、つまり細胞免疫のシステムが考えられるようになったわけですが、そうすると訳のわからない、とても困つたことが出てきました。それは、「自己免疫」ということです。一般に細胞の内部ではつねに遺伝子の解釈エラーが生じていて、非自己が発生してきている。それに対して、免疫系がそれは自己ではないと判断して排除していく。ところが正



常な細胞がガンにおかされると、その区別ができなくなつて、ガン細胞のほうが自己を主張しはじめる。ガンにかぎらず、病気は一般に免疫の問題なのですが、もつとも厄介なのが自己免疫疾患です。自分自身に対して免疫を働かせてしまうわけですからね。つまり、自分と自分でないものとの区別が決定できない状態。ここから先を考えてみますと、非常に突飛な考えに行きつくのです。それは、生命の発生の段階で、本来的に自己免疫にならざるをえないようになっていたのに、何らかの形でそれを免れてきたのではないか、ということです。

それはちょうど、経済学における岩井克人の「不均衡理論」に似ています。古典派の経済学も新古典派のそれも、まず均衡システムというものを考え、その中で、なぜ均衡が達成できないのかと問います。そして、それは何らかの邪魔ものがあるからだということになる。これを「一般的」マルクス主義の文脈でいいかえると、資本主義はどうしていけないのか、それは労働力商品があるからだ、それではその労働力なるものを止揚すれば「均衡」がもたらせられるだろうと、こうなります。労働力という商品は人間が生産する（育てる）ものですから、資本主義というシステムが自己を均衡させるために、その（労働力という）商品を勝手に増やしたり減らしたりすることはできません。いつでも労働者が不足したり過剰になったりしている。とにかく、このような邪魔ものを除くという発想が古典派の発想であり、そして、そこから出てきたかぎりでのマルクス主義の発想でもあるわけです。それは資本主義はこうすればうまく社会主義に移行する、というようなまことに楽天的なものです。

もう一つは、新古典派です。これもまた、とにかく邪魔ものを排除すればよいという発想です。それは、たとえば「独占」が邪魔している、国家の政策も邪魔している、また労働組合もシステムの均衡の実現を邪魔し